

【頼もしい高校生】

8月なので、先ず交換留学生としてアメリカで1年間過して6月に帰国した17才の高校生の投書をご紹介します。

「第2次世界大戦を学ぶ授業では、ヒロシマ、ナガサキについて、教科書に『長期化する戦争を終結させるためにアメリカは原爆投下を行った』とあった。先生も『原爆を投下していなかったら、日本は戦争を継続し、もっと多くの犠牲者を出していただろう』とアメリカの行為を正当化した。

『何という認識！』私はショックで血の気が引きすぐに異議を唱えた。原爆がいかにか非人間的兵器かということ。現在も後遺症で苦しんでいる人が大勢いること。どんな理由があっても一般市民を殺戮するのは絶対間違っていること。そして日本はあの愚かな戦争を反省し、二度と戦争をしないと誓ったこと。



先生は後日、無神経なことを言って日本人である私を不愉快にさせたことを詫びてくれた。そして、他国民の立場になって歴史を見ていかなければいけない大切さを、皆の前で話してくれた。」

彼は、先生の説明に血の気が引いたと言っています。それなのに即座に異議を唱えました。日本の国内でも、これだけの意見を人の前ではっきりと述べることの出来る人は、少ないのではないのでしょうか。それがアメリカ人に囲まれた教室で、しかも英語で話すのですから、大変な勇気が必要だったことでしょう。偉いですねー。そして頼もしいですねー。

今学校教育に対する信頼が薄れて来ています。先生への不信が募っています。でも一方では、このような高校生も育っているのですね。とても嬉しくなりました。若い人たちよ、頑張れ！アジアに世界にどんどん出て行って、日本で学んでいることを、はっきりと伝え、またその国からも学んで来て、伝えて欲しいと思いました。

また先生の態度にも感心しました。後日生徒たちの前で、自分の非を率直に認め、他国民の立場になって歴史を見ていかなければいけない大切さを教えた由。偉いですね。このような先生だから、彼も率直に異議を唱えることができたのでしょう。日本から来た学生に、生涯の宝となる経験を与えてくださって有難うと、心の底から御礼を言いたくなりました。

【これからの中国】

中国の発展ぶりを世界にアピールしようと、国家の総力をあげて開催に取り組んできた北京オリンピックも悲喜こもごものドラマを数多く生みながら、華やかに進められています。金メタルの数も中国がダントツで、国民の喜びも一入でしょう。愛国心が大いに盛り上がりました。これからの中国が、世界平和に大きく貢献して欲しいものです。



中国は多数の民族を併合し広大な領土に13億人を超える人口を有する大国です。国内産業の成長も著しく2011年には国内総生産額で日本を抜くだろうと言われています。これからは、先進国主導の地球温暖化対策で、温室効果ガス規制の厳しい圧力を受けることでしょう。日本との関係も利害がぶつかり、年々厳しくなっています。

その時に鍵を握るのが両国の国民感情です。新聞に青年海外協力隊員として3年前に、万里の長城に近い張家口の病院に派遣された看護師三瓶さん（29才）の話が載っていました。日本軍が8年間占領していた町です。

「日本人がここに何をしに来た」 彼女はベットに横たわる老人たちからの怒声に迎えられました。「日本兵がおれに何をしたか知っているか」 ある老人は右手と右足に残る刀傷を見せました。「奴等は赤ん坊を刀で突き刺し女たちに手を出したんだ」

それでも彼女は日々看護の仕事に励みつつ、老人たちから話を聞きました。2年後に帰国する時、老人たちは別れを惜しんでくれたそうです。よくもまあ張家口に行きましたね。逃げ出さずにじっと相手の話を聞き続けた勇気。偉いですね。

中国の若い世代の間にも、経済大国日本への反感と国内の矛盾をなかなか解決出来ない苛立ちからくる嫌日感情があると言われています。でも日本人にも大国化する中国への反感と閉塞感から抜け出せない日本自身への苛立ちからくる嫌中感情があります。互いの「嫌」感情をどう乗り越えるか。

市民レベルでも、お互いに自分の思いを率直に出し合い、相手の思いに耳を傾けて、違いに向き合うことから、信頼と友情の糸口をつかむことが求められていると思います。そのための交流がオリンピックを機に、深まることを期待します。